

国語

第1回 (9月)

テスト 時間	50分
-----------	-----

平均点 (都標準)	51点
--------------	-----

問題番号	正答率	問題番号	正答率	問題番号	正答率			
1	(1)	47.9	3	[問1]	76.8	5	[問1]	22.0
	(2)	63.3		[問2]	77.5		[問2]	60.1
	(3)	81.2		[問3]	80.5		[問3]	52.5
	(4)	45.2		[問4]	19.1		[問4]	33.6
	(5)	38.6		[問5]	53.8		[問5]	85.9
2	(1)	66.8	4	[問1]	23.6			
	(2)	4.3		[問2]	63.0			
	(3)	53.3		[問3]	51.1			
	(4)	19.8		[問4]	45.7			
	(5)	71.7		[問5]	1.9点			

注：4[問5]の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 摩耗した部品を交換する。
- (2) 鶏卵と小麦粉でお菓子を作る。
- (3) 目の粗いざるで野菜の水を切る。
- (4) 教会は厳かな空気に包まれていた。
- (5) 友人の夢を実現するために奔走する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 窓から横断幕をタ_ラらす。
- (2) 本のソウテイに工夫をこらす。
- (3) 寒さで筋肉がシユウシユクする。
- (4) ここは日本有数のコクソウ地帯だ。
- (5) 明日の午後二時に友人の家をタ_ズねる。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

高校一年生の慧一は、小学校の頃から続けていた剣道を、中学三年生の夏の大会を最後にやめていた。ある日、龍心という片腕の生徒から一緒に剣道をやろうと誘われ、強引に剣道場に連れ出される。龍心に促されるまま稽古をした慧一だったが、論理的に戦術を立てることはできても、小柄でひ弱な自分の剣道は高校では通用しないと告げ、龍心の誘いを断ろうとした。

龍心はしばらく黙っていたが、やがてフツと小さく笑った。

「だけどお前は、それでも剣道に惹かれてる。そうだろう？」

龍心の言葉に、慧一は黙って顔を上げる。彼が正座を解いてあぐらをかいたので、慧一もそれに倣った。

「剣道ってのは、不思議な競技だと思わねえか？」不敵な笑みを浮かべ、龍心は続ける。「町道場か何かを覗いて見ろ。男女が混じって稽古するのは当たり前。それどころか、六十を越えたじいさんと大学生が、当たり前のように勝負してるぜ。他のスポーツじゃ、こんな状況はあり得ねえ。どうして、そんなことが起こり得る？」

(1) 龍心は、そこで言葉を区切る。盛り上がった右腕の筋肉が、やけに目についた。慧一が何も答えないのを確認してから、先を続ける。

「男だろうと女だろうと、学生だろうと年寄りだろうと、腕が一本だろうと二本だろうと。同じ土俵で戦えるんだよ、剣道は。どんな人間だって、分け隔てなく受け入れてくれるんだ」

(2) どんな人間だって、分け隔てなく……。

龍心の言葉を心の中で繰り返し、慧一は思わず、自分の両腕に視線を落

とした。細くて白い、情けない腕。

「この連中はみんな、人とは違う問題児たちだ」龍心は道場をぐるりと見回してから、親指で肩越しに、入り口の方を指し示した。「たとえば、さっきの部屋で寝ていた中本さん」

「ああ、たしかに。ちよつと変わった人だったね」

慧一は、部屋にいた茶髪の男の姿を思い出した。妙に納得して頷くと、龍心は苦笑した。

「あの人は、後先考えないで行動して、いつも問題を起こしている。今日カラオケで徹夜したら、明日どうなるか。そういうことに、頭が回らないんだよ。深く考えずに髪の毛染めたり、ピアスあけたりしたときも、担任に大目玉を食らったらしい」

まあ、結局は放っておかれてるだけだな。そう付け加えてから龍心は、右手を大きく振って勢いをつけ、「よっ」と言いながら立ち上がった。腰に右手を当て、くすんだ窓を眺める。外はいつの間にか、紺色に沈もうとしていた。

「俺たちはみんな似たようなもんさ。だけど、欠けているものがある代わりに、人よりとがっている部分もある。言ってみれば、でこぼこなんだ。だから、名前をつけた。『でこぼこ剣士会』。それが、俺たちの名前だ」

慧一は、何と答えればよいのか分からず、ただただ龍心を見上げていた。でこぼこ、剣士会……。口の中でつぶやくと、ドクン、と心臓が高鳴った。そのことに、自分で驚く。久しく忘れていた、昂揚という感覚だった。

「俺たちは、どんな『でこぼこ』な個性でも受け入れる。剣道が、どんな人間をも分け隔てなく受け入れてくれるみたいにな。『でこぼこ剣士会』

は、世界一平等な剣道チームなんだ」

世界一平等な、剣道チーム。

その言葉に、なぜだか強烈な魅力を感じ、慧一の心臓はさらに大きく脈打った。

「この会ができたのは去年。まだ歴史が浅くって、同好会のままなわけだ。変な伝統や決まりがない分、ずいぶん好き放題やらせてもらっているよ」

おかしそうにそう言うと、龍心は急に中腰になり、慧一の顔を覗き込んできた。

「どうだ？　ここなら、『欠けているもの』なんて気にしなくていい。なにしろ、どんな人間も平等に扱われるんだからな。お前は、お前のやりたい剣道ができる。それから、一緒に見に行こうぜ。剣道の一番深いところを」

真つ直ぐに目を見据え、真つ直ぐに放たれた言葉だった。それはたしかに、慧一の心の芯へと届き、揺さぶり、沁み入っていく。

僕が、僕の剣道ができる。そして一緒に見に行く。剣道の一番深いところを。

僕にも、やれるのかな？

汗で濡れた、自分の両手に目を落とす。よくよく見ると指の付け根に、かすかなマメの跡が並んでいた。かつて、指の皮がはがれるまで、必死に竹刀を振った跡。痛くても苦しくても、剣道が大好きだった。それを両手は、はつきりと教えてくれていた。

(3) 何かを握みとるように、ギョツと握りしめる。

「僕は……」

「やっほー！　龍心！」

静かに発せられようとした決意は、不意に飛んできた甲高い声に遮られてしまった。固まった意志が、喉元のところまで途方に暮れる。慧一は仕方なく、決意の言葉を一時呑み込んで、声が出た方、道場の入り口辺りへと目を向けた。薄いピンク色のブラウスに、短めの紺のスカートをはいた女の子が、ちょこちょここと駆け寄ってくる。慧一は、「あっ」と声を上げた。「ああ、蓮」龍心は、軽く右手を上げて彼女に応える。「どこにいたんだ？」

「どこにいたんだ、じゃないでしょ。二学期もこの剣道場を使えるように、申請してきたんだから。顔も見たくない軍曹に、わざわざ書類出しに行つたの」

片方の頬を膨らませ、不機嫌そうに彼女は言う。慧一よりも背の低い、淡いブラウンの髪をした女の子。リスのように大きな目が、慧一と龍心とを交互に見つめる。ちょっと慌てて、慧一は立ち上がった。

「そうか。助かった」龍心は蓮にそれだけ言うと、今度は慧一の方を振り向いた。「同じクラス、だったよな？　蓮は、うちのマネージャーなんだ」

「そう。グータラなでこぼこ剣士たちのために、日夜働いてまーす」

龍心の言葉を引き継いで、片手を高らかに上げて蓮は言った。やけに大袈裟な動作に、慧一は苦笑する。

「マネージャーだったんだ。知らなかった」

慧一はそう言うと、蓮の方に目を向け、意味もなく会釈した。彼女はちよつと首を傾げると、慧一の姿を上目遣いでじっと見つめる。慧一はふ

と、彼女と先週交わした会話を思い出した。

「もしかして、龍心君に僕のことを教えたのは、君？」

「イエス！」

満面の笑みを浮かべて、蓮は楽しそうに言った。彼女はチラッと、龍心へと横目を遣う。

「この人たちだったら、新しい仲間を集めたがつてるくせに、なんにも行動しないんだもん。だからあたしが、龍心に教えてあげたの。うちのクラスに経験者がいるよ、って」

慧一は龍心の方を見た。龍心は、頭の後ろに手を当てると、ぼつが悪そうに視線を逸らす。

ちよつとためらってから、慧一は口を開いた。

「そうだったんだ。でも僕は……、入部、いや、入会するかどうか、まだ迷ってて……」

「そんなこと言わずに、もう人っちまえよ」

「えっ、でも……」

慧一が言葉を濁すと、蓮はまた楽しそうに笑った。

「まあでも、入らない方がいいかも。この人たち、なんだか変だし」

「おい、そりゃあねえだろ。勧誘する気あんのか」

「だって、ホントのことでしょ？」

まったく悪びれる様子もなく、無邪気な笑みを振りまく蓮。龍心はため息を吐いたが、それ以上は何も言わなかった。

暗くなった窓には、三人の姿がぼんやりと映っている。どこか遠くで、蟬せみが鳴いている。か細く、それでいてけなげな鳴き声だった。

夏の盛りはもう終わった。

(4) けれど慧一の胸には、何かが始まる予感のようなものが満ちていた。諦めたはずの何かが、消えたはずのかがり火が、慧一の胸の内、再び小さく燃え始めていた。

(5) 神棚の上に掲げられた「一長一短」の書が、三人の高校生たちを、否定も肯定もすることなく、ただただ黙って見下ろしていた。

(向井湘吾「かまえー！ぼくたち剣士会」による)

〔注〕 軍曹——慧一たちが通う高校の体育教師のあだ名。

彼女と先週交わした会話——慧一は、自分が剣道の経験者で、授業で模範試合をするように軍曹から頼まれたことを蓮に話していた。

〔問1〕 (1) 龍心は、そこで言葉を区切る。とあるが、龍心が言葉を区切ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 剣道の不思議な現象について慧一がどう答えるかを聞いて、慧一が剣道の本質を正しく理解しているかどうか試そうと思ったから。

イ 自分の思いを伝えたいと焦るあまり、早口になっていたのに気づき、慧一が話の内容を理解できているか確かめようと思ったから。

ウ 一方的に相手を説き伏せるのではなく、慧一が剣道としっかり向き合えるよう、反応を確かめながらじっくり話そうと思ったから。

エ 話しているうちに気持ちが高ぶってきたため、いったん自分自身を落ち着かせ、話す内容を整理しておく必要があると思ったから。

〔問2〕 (2) 龍心の言葉を心の中で繰り返し、慧一は思わず、自分の両腕に視

線を落とした。とあるが、このときの慧一の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 剣道がどんな人間も分け隔てなく受け入れるというのは理想にすぎず、自分は通用しないだろうと思い、やりきれなさを感じている。

イ 龍心の言葉に勇気づけられるとともに、剣道でなら小柄でひ弱な自分でも活躍できるかもしれないと考え、うれしさを感じている。

ウ 剣道はどんな人間も分け隔てなく受け入れるという言葉から、小柄な自分が強い相手を倒す姿を想像し、心が浮き立つのを感じている。

エ 龍心の言葉に心が動かされたものの、体格で劣る自分が本当に人と対等に剣道をやれるという確信は持てず、ためらいを感じている。

〔問3〕⁽³⁾ 何かを掴みとるように、ギョツと握りしめる。とあるが、この表現から読み取れる慧一の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 必死に竹刀を振っていた頃を思い出し、もう一度剣道に真剣に取り組み、試合で勝てるだけの腕力をつけようと決意している様子。

イ 龍心の真つ直ぐな言葉に触発されて剣道に対する情熱がよみがえり、今すぐ剣道をやりたいという衝動に突き動かされている様子。

ウ ひたむきに練習に打ち込んでいたときの気持ちを思い出し、もう一度大好きな剣道をやりたいという思いが込み上げてきている様子。

エ 自分が体格を言い訳に剣道から逃げていたことに気づき、これからは努力を積み重ねて弱点を克服しようという決意を固めている様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ けれど慧一の胸には、何かが始まる予感のようなものが満ちていた。とあるが、このときの慧一の気持ちを四十字以上五十字以内で書け。なお、や・なども、それぞれ字数に数えよ。

〔問5〕⁽⁵⁾ 神棚の上に掲げられた「一長一短」の書が、三人の高校生たちを、否定も肯定もすることなく、ただただ黙って見下ろしていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「一長一短」の書を視点として静的に場面を描くことにより、人物の個性をありのままに受け入れる場の存在を印象的に表現している。

イ 「一長一短」の書の視点から見下ろす形で人物を描くことにより、これから三人が苦悩しながら生きていく姿を暗示的に表現している。

ウ 「一長一短」の書を人物に見立てて描くことにより、努力によって短所を克服し、成長していくことの大切さを象徴的に表現している。

エ 「一長一短」の書と人物を対比して描くことにより、時とともに変化するものもあれば不変なものもあることを客観的に表現している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

科学研究の第一要件は知識を創出することにある。特に、自然を相手にする科学においては、物質の構造・運動・反応性・質的变化・他との関係性・歴史性などを追究し、そこから得られる原理や法則に関して新しい発見がなくてはならない。それがいかに些細ささいで取るに足らない事柄であろうと、新事実である限りでは尊重される。それらの新事実の積み上げがあつて初めて科学が成り立つのだから。一つのノーベル賞級の超一流の仕事には一〇〇の一流の仕事があり、一つの一流の仕事には一〇〇の名も知れない仕事の積み重ねがある。このように科学の成果は階層構造をなしており、発見の大小の差はあつても一つ一つがピラミッドの一角を構成している。そのいずれもが、人間が獲得した自然に関する新しい知識なのである(むろん、失敗例にも価値がある。それによって再び同じ失敗を繰り返さないからだ)。(第一段)

科学の研究の発端は、科学者個人の好奇心に基づいている。「なぜそうあるのか」を問い質たそうとする心の働きである。アインシュタインは子どもの頃、磁石の動きを見てその不思議さをずっと忘れないでいたという。アインシュタインならずとも、見えない部分で何が起こり、どのような仕組みが働いているのかを知りたいと誰しもが思う。それは人間が獲得した未知のものへの探究心であり、何とかしてその謎を明らかにしたいという願望が研究に駆り立てるのである。(第二段)

そこには想像力が重要な役割を果たしている。科学の発想は想像力に基づく「仮説」が出発点となるからだ。「仮説」は現象を統一的に説明でき

るよう設けた仮定のことであり、最初の段階では何らの根拠を持たない。その意味では、出発点において科学は芸術と何ら変わるところはない。想像力を駆使して新しい着想を得る点では全く同じであるからだ。このような発想が起こるに際して、実験による現象を見て、思考実験によって、旧理論の矛盾を見つけて、単純にこうあれば面白いと感じてなど、さまざまな契機がある。また、思いつき、勘、インスピレーション、ひらめき、セレンディピティー(偶然の発見)、というような何とも形容しがたい心的過程を経ており、その背景には見えない部分で起こっている事柄に対する意識せざる想像力が働いていると考えてよいだろう。(第三段)

そのような些いさか漠とした想像が土台となり、そこから論理を組み立てて筋道をつけ、実験や理論の構築へと進んでいく。その思考過程においては、常にある種のイメージを頭に生起させて試行錯誤を続けている。そのイメージと実際の計算や実験結果に齟齬そごが生じた場合、想像していた仮説を変更するか、論理の筋道を辿たどり直すか、計算や実験を再構築するか、のフィードバックが入る。¹⁾ここにおいて科学者は真実に忠実である。例えば、仮説が間違っていると気づけば、それに固執するのではなく、素直に変更する。イメージ通りでなければ必ず違和感を持つから、潔いさよく新しい仮説に乗り換えもする。この作業も芸術家に似て極めて感覚的のように見えるが、論理に従うとはそのような過程が自然に進むということでもあると言える。(第四段)

つまり、知識の創出においては、好奇心によって問題に気づき、想像力によって仮説を抱き、論理性によって筋道を鍛え上げるというプロセスをとっており、その各々の能力が科学研究者の要件となるのだ。(第五段)

ところで、研究者の純真な意識において科学はいかなる意味を持つて
るだろうか。その第一は、純粋な好奇心のみに基づいた探究の欲求である。
自然の法則を明らかにしたいとの一念で謎に挑んでいるからだ。結果やそ
の応用については何ら気にせず、ましてや名声や褒賞への欲望もなく、ひ
たすら研究に集中する。「科学のための科学」に殉じているのだ。「文化と
しての科学」と言つていいかもしれない。科学は文化の一部門として、主
として人々の精神的活動に寄与するためである。(第六段)

(2) その意味では純粋ではあるが、危うさもある。^{*} パンドラの箱と同様、箱
を開けることのみならず夢中になって、そこからどのようなものが飛び出し
てくるかについて一切頓着しなくなるからだ。そして、自分が創り出したも
のがいかに醜悪で害悪を与えるばかりではあつても、それを研究する自由
はあつて誰も阻止できないと言ひ、その使い方は社会の選択だから自分に
は責任がないと嘯く^{うそを}ことになる。それは無責任だと言へるのではないだろ
うか。社会と切り離された科学はないからだ。科学者も社会の一員であり、
その選択に関与しているのは確かだ。自分に責任はないと言えないのである。
(第七段)

また、応用から極めて遠い分野なら、そのような懸念^{けねん}は不必要だが、技
術に近接している場合には、どのように科学が使われるかを予想する心構
えが求められる。「道具としての科学」という側面が避けられなくなる。
原理を求める科学そのものが目的なのではなく、科学を道具に使うという
ことに陥りやすくなるからだ。^{*} マンハッタン計画における原爆の開発は、
そのような科学の典型的な利用であつた。核分裂の連鎖という原理的な科
学の法則はわかつていて、それをいかに効率的に爆弾として実現するか

科学が動員されたからだ。(第八段)

現在は、「社会のための科学」が広く言われるようになった。科学の社
会的効用(社会に役立つ)という意味もあるが、広く社会との関係を強く
意識した科学研究であるべきという意見である。社会との接点や社会への
還元を意識すること、社会からの信頼や付託に答えられること、社会的要
請に応じることなど、現実社会との関係を抜きにした科学はないというわ
けだ。単なる「道具としての科学」ではなく、積極的に科学の社会的機能
を考へる上では重要な観点である。しかし、ともすれば社会や技術開発に
役立つ科学に偏り勝ちになることを用心しなければならない。科学研究が
国家の庇護^{ひご}を受け(後に述べる「科学の制度化」)、知的財産という側面が
強調される(「科学の商業化」)ようになり、現実社会における科学の有用
性のみが問われるような状態になりつつあるからだ。^{*} ニュートリノの検出
でノーベル賞を授与された小柴氏^{こしば}に対して新聞記者が最初に発した質問は、
「ニュートリノはどんな役に立つか?」であつた(それに対し、小柴氏は
^{*} 言下に「何の役にも立たない」と応えたそうだ)。「社会のための科学」は
社会的実利のことではなく、社会に息づく文化への寄与としての科学であ
るべきだと思う。⁽³⁾ つまり、文化の煌めきがあることこそが科学の不可欠な
要件なのではないだろうか。(第九段)

もつとも、「科学のための科学」であつても「社会のための科学」と本
質的な違いはないとも言へる。文化の創造も社会のためであり、科学は社
会とは無縁に存在するものではないからだ。(第十段)

(池内 了「科学・技術と現代社会(上)」による)

〔注〕 齟齬——矛盾。食い違い。

フィードバック——結果を見て、改良したり調整したりすること。

パンドラの箱——ギリシャ神話に出てくる、あらゆる災いの詰まった箱のこと。この箱をパンドラという女性が開けたために、あらゆる災いが地上に飛び出し、箱の中には希望だけが残った。

嘯く——とぼけて知らないふりをする。

マンハッタン計画——第二次大戦中にアメリカで進められた、原子爆弾の開発計画。

ニュートリノ——素粒子（物質を構成する最小の単位）の一つ。言下に——相手が言い終わるか終わらないかのうちに。

〔問1〕⁽¹⁾ ここにおいて科学者は真実に忠実である。とはどういうことか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 科学者は、想像力に基づいて仮説を立てるが、実際の計算や実験結果がイメージと異なった場合は、直感的に仮説を更新するということ。

イ 科学者は、仮説を立ててから理論を構築するまでの過程で想像力を駆使しており、芸術家と同様に感覚の鋭敏さが求められるということ。

ウ 科学者は、想像から新しい理論を得る過程で、芸術家と同様に常にあらゆる種のイメージを生起しながら試行錯誤を続けているということ。

エ 科学者は、発想から論理を組み立てて理論を構築する過程において、実際の計算や実験結果に基づいてその筋道を鍛え上げるということ。

〔問2〕 この文章の構成における第六段の役割を説明したものと最も

適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた内容について、それと反する見解を具体的に説明して話題を転換している。

イ それまでに述べてきた内容について、新たな観点に基づく考え方を示して論の展開を図っている。

ウ それまでに述べてきた内容について、その根拠を補足する事例を挙げて論を分かりやすくしている。

エ それまでに述べてきた内容について、予想される疑問とその答えを示して論の妥当性を強調している。

〔問3〕⁽²⁾ その意味では純粹ではあるが、危うさもある。とあるが、筆者がこのような述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 科学者が好奇心に基づいた研究に集中するあまり、自らの創出した知識の使われ方についての責任がないがしろになると考えたから。

イ 科学者が熱心に研究に取り組めば取り組むほど、結果として、社会に害悪を与える醜悪なものが創出されることになると考えたから。

ウ 科学者が真剣に自然の法則を研究している一方で、社会は創出された知識の有害性を考慮せず、無責任に使用していると考えたから。

エ 科学者が好奇心にかられて研究するばかりで、自らの研究が実社会で有用であるかどうかについて無頓着になっていると考えたから。

〔問4〕⁽³⁾ つまり、文化の煌めきがあることこそが科学の不可欠な要件なのではないだろうか。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 科学は技術開発につながる知識を創出することによって社会の発展に

寄与し、社会に息づく文化を創出する可能性があると考えたから。

イ 科学は広く社会との関係を意識し、知識を創出することを通して、社会に息づく文化や人々の精神活動に寄与するべきだと考えたから。

ウ 科学が原理の追究に偏りすぎると、創出された知識で社会が壊される恐れがあるため、文化によって規制する必要があると考えたから。

エ 科学に「道具としての科学」という側面がある以上、文化の一部門として社会における有用性のみを追究していくべきだと考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「社会のための科学」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・やーなども、それぞれ字数に数えよ。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

(1) 『伊勢物語』が『伊勢物語』と呼ばれるのはなぜか。さまざまな説がありますが、現在の普通の本では第六十九段になっている章段が最初に書かれたからだ、と思われまふ。

その章段は、「昔、男ありけり。その男、伊勢の国に狩りの使ひに行きけるに……」という書き出しで始まります。

「今は昔、竹取の翁おきなといふ者ありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことに使ひけり」というように、まず登場人物を紹介し、次にその人物の行動の説明に入るのが、物語の冒頭の書き方のパターンです。ですから、「昔、男ありけり」と紹介し、続いて「その男、伊勢の国に狩りの使ひに行きけるに」と述べるのが『伊勢物語』全章段の書き出しのパターンであるはずですが、この基本に従っているのは、この第六十九段と、後で述べる東下りの段あすまくた（第九段）だけで、この二つの章段が『伊勢物語』の根幹をなしていることをおのずからに物語っています。

このことから見ても、『伊勢物語』という全体の書名がこの第六十九段に発していることを納得していただけたらと思います。

主人公が出かけた「狩りの使ひ」は、本来、天皇が諸国の鳥獸までを支配しているということを確認するために行う神事ともいえる行事でしたが、在原業平が活躍した時代に在位していた清和天皇は仏教を崇敬うやまつし殺生せつしようは行わない主義でしたので、その治世の十九年間（八五八〜八七六）に、狩りの使ひは一度も行われていません。だから、業平時代の読者は「その男、伊勢の国に狩りの使ひに行きけるに……」という書き出しの部分を読んだ

だけで、「この話は事実ではないな、フィクションだな」と思ったはずで
す。

さて、その男は、伊勢の国に行き、皇室*うしぎみの氏神*うぢがみである皇大神宮*こうたいじんぐうを奉祀*ほうしする齋宮*いみと密通*ひみつうしてしまいます。齋宮は、天皇の娘か姉妹にあたる内親王*ないしんおうであるばかりか、天皇に代わって皇大神宮に仕えて国家の祭祀に重大な役割を果たしている女性ですから、これと密通するなんて、とんでもないことです。許されるはずがありません。では、そんなありえないこと、あつてはならないことを物語に書くのはどうしてでしょう。ありえないことなのだ、フィクション以外の何物でもないのだという認識でこの物語が書かれていたという前提で読者は読まなければならない、ということを作者は示しているのです。

さて、神に仕える神聖な皇女である齋宮とともに夢のような一夜を過ごした主人公は、朝起きて、夢心地のまましていると、齋宮の方から、歌が届けられます。その歌には、

君や来し 我や行きけむ 思ほえず 夢か現か 寝てか醒めてか

「あなたがいらっしやったのか私の方からうかがいましたのか、お逢あいしたことは、夢であったのか現実であったのか、寝ていましたのか目覚めていましたのか、覚えありません」と書いてありました。男女が逢った翌朝、男の方から後朝*ごさきあその歌を贈ってその愛を確認するのが当時のならわしでしたが、これは、女の方から、しかも神に仕えている齋宮から贈られて来たのです。こんなことはありえない、まさに夢のような話だと言えます。

そのように考える時、この齋宮の歌の特徴として目立つ「君や来し」と

「我や行きけむ」、「夢か」と「現か」、「寝てか」と「醒めてか」というような対句表現の連発は、

起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとてながめくらしつ

*こきんしゅう
(古今集・恋三)

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ

(古今集・恋一)

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

(古今集・恋四)

など、『古今集』の在原業平の歌に見られる著しい特徴と共通していることに気づかざるをえません。加えて言えば、この章段の話が中国の唐代の元稹*げんしん（白楽天の親友です）が作った伝奇小説『鶯々伝*おうおうでん』の翻案であるという説も無視できません。『伊勢物語』の基点になったこの第六十九段は、(3) 事實譚*じじつたんではなく、中国の伝奇を参考にして在原業平自身が作ったフィクションであることが、近年の研究でわかって来ているのです。

第六十九段のほかに、もう一例「昔、男ありけり。その男……」という物語冒頭の基本形式をとっている章段は、有名な東下りを語る第九段です。

昔、男ありけり。その男、身を用なきものに思ひなして、京にはあらず、東あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、まどひ行きけり。三河みかはの国八橋やっはしといふ所に至りぬ。

で始まるこの段に関連して、愛知県知立市には無量寿寺をはじめとする多くの遺跡も作られていて、古くから業平の実録と信じられてきましたが、当時は、貴族が自由旅行をすることは許されていません。まして、気の合う友達二、三人がいれば徒党をなして旅するなどということは、許可されるはずありません。これも、フィクションと考えるほかないのです。

では、まったく実行できもしない旅を、何故に物語にしたのか。答えは簡単。現実にはありえないことであるゆえに、物語の世界で実現しようとするのです。

(4) 当時、野外に出て山野に心を遊ばせることは、まさしく「みやび」の実現だったのです。この第九段には用いられていませんが、第六十七段は「昔、男、逍遙せうせうしに、思ふどち＊かいつらねて、和泉の国へ二月ばかりに行きけり」と書かれ、第六六段には「昔、男、親王みこたちの逍遙せうせうし給ふ所にまうで」と書き出されています。この「逍遙せうせう」という語は、中国六朝時代の文人の世界で流行した語ですが、山野を遊覧し、心を解き放つことによつて、俗にとらわれない悠々自適の世界を求めるものでした。「身を用なきものに思ひなして、京にはあらじ」という姿勢は、まさしくその逍遙の姿勢です。榮進・榮耀えいようの世界にもつながる官の世界ほど俗なるものはない、それを棄すて去るためには、「身を用なきものに思ひなして」京から出て行かなければならない、ということなのです。できないけれども、してみたいこととして「もとより友とする人一人二人して」の東下りが語られているのです。許されるはずのない斎宮との逢瀬おうせを描いてみると同じこと。ありえないこと、許されないことに思いを馳はせ、思いを膨らませてみたヴァーチャル・リアリティの世界が、人々の心の終着点として『伊勢物

語』に表現されているのです。

〔注〕

『伊勢物語』——平安時代の歌物語。

在原業平——平安時代の歌人。『伊勢物語』の主人公とされる。

氏神——氏族の先祖を祭った神。

奉祀——神仏をまつること。

密通——ひそかに恋愛関係になること。

後朝の歌——一夜をともした翌朝に贈る歌。

古今集——『古今和歌集』の略称。平安時代の歌集。

白楽天——白居易。中国唐代（中唐期）の詩人。

翻案——原作の筋や内容をもとにして、作り変えること。

思ふどち——気の合った者どうし。

ヴァーチャル・リアリティ——仮想現実。

〔問1〕『伊勢物語』が『伊勢物語』と呼ばれるのはなぜか。とあるが、

その理由として筆者はどんなことを挙げているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 現在では最初に書かれたと考えられている第六十九段の書き出し部分に、主人公が「伊勢の国」に住んでいたという記述があること。

イ 冒頭の基本形式に合致した二つの章段が『伊勢物語』の根幹となっており、その二つの章段に「伊勢の国」の場面が描かれていること。

ウ 成立順序や冒頭の形式から考えて、『伊勢物語』の基点をなすと考えられる第六十九段が、「伊勢の国」を舞台にした話であること。

エ 「伊勢の国」を舞台とした第六十九段の冒頭の記述によって、『伊勢物語』がフィクションであるという前提が示されていること。

〔問2〕思ほえず⁽²⁾の意味に相当する部分を、本文中から十字以内でそのまま抜き出して書け。

〔問3〕第六十九段は、事実譚⁽³⁾ではなく、中国の伝奇を参考にして在原業平自身が作ったフィクションである。とあるが、筆者は、中国の伝

奇小説を翻案としているという説以外に、どんなことを根拠として、第六十九段が「在原業平自身が作ったフィクションである」と述べているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 史実では実行されなかった狩りに行っており、在原業平しか知り得な

かった齋宮との逢瀬が和歌の内容に至るまで詳細に描かれていること。

イ 物語はフィクションを描くことが当時の常識であり、『古今集』の在原業平の歌と同様の技巧を凝らした歌が作中に詠まれていること。

ウ 物語の書き出しのパターンや歌の詠まれた場面が特殊であるうえに、

作中の歌が『古今集』に採られた在原業平の歌と一致すること。

エ 物語の設定や内容が現実にはあり得ないものであることに加えて、作中の齋宮の歌に、在原業平の歌の顕著な特徴が見られること。

〔問4〕当時、野外に出て山野に心を遊ばせることは、まさしく「みやび」の実現だったのです。とあるが、この文章における「みやび」とはどのようなものであるかを表している部分を、本文中から十五

字でそのまま抜き出して書け。

〔問5〕官の世界ほど俗なるものはない、とあるが、この「ほど」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——をつけた「ほど」のうちから選べ。

ア 水を一カップほどなべに加えて、ことごとと豆を煮た。

イ 私にとって、家ほど心安らぐ場所はないと思っている。

ウ 熱が出て、もう三日ほど満足に食事もできないでいる。

エ ものを知らないにもほどがある、と先生に注意された。

《国 語》

偏差値	第1回 (9月)	第2回 (10月)	第3回 (11月)	第4回 (12月)	第5回 (1月)
76	96	95		97	96
75	94	94		96	94
74	92	93	100	94	93
73	91	92	98	93	92
72	89	91	97	92	90
71	87	90	96	91	89
70	85	88	95	89	88
69	84	87	93	88	87
68	82	85	92	87	86
67	80	84	90	86	85
66	78	82	88	84	84
65	77	80	86	82	82
64	75	79	85	81	80
63	73	77	83	79	79
62	72	75	81	77	77
61	70	74	79	76	76
60	68	72	77	74	74
59	66	70	76	72	72
58	65	69	74	71	71
57	63	67	72	69	69
56	61	66	70	68	67
55	59	64	69	66	66
54	58	62	67	64	64
53	56	61	65	63	63
52	54	59	63	61	61
51	52	57	61	59	59
50	51	56	60	58	58
49	49	54	58	56	56
48	47	52	56	54	54
47	45	51	54	53	53
46	44	49	52	51	51
45	42	47	51	49	50
44	40	46	49	48	48
43	38	44	47	46	46
42	37	43	45	45	45
41	35	41	44	43	43
40	33	39	42	41	41
39	31	38	40	40	40
38	30	36	38	38	38
37	28	34	36	36	37
36	26	33	35	35	35
35	25	31	33	33	33
34	23	29	31	31	32
33	21	28	29	30	30
32	19	26	28	28	29
31	18	25	26	27	27
30	16	23	24	25	25
29	14	21	22	23	24
28	12	20	20	22	22
27	11	18	19	20	20
26	9	16	17	18	19
25	7	15	15	17	17

×の例

・無邪気な笑みを振りまく蓮に好意を感じ、蓮が自分のことを紹介したのなら剣士会に入ってもいいという気持ち（蓮に惹かれて）という動機は誤読。）

・でこぼこ剣士会が自分の剣道ができて、世界一平等な剣道チームだと龍心は言うが、本当だろうかという気持ち。（「本当だろうか」という疑いの気持ちでは×。）

・龍心のいる剣士会では、かなり好き放題にやらせてもらえることがわかり、また剣道を続けようという気持ち。

・剣道をやりたいという思いが強い。周りなんて関係ない、細くても弱くても諦めずにかんばろう。

・自分がこの会に入ること、自分が剣道の大会に出て、優勝したりするのではないかという気持ち。

〔問5〕 「一長一短」は、龍心の言葉で言えば「でこぼこ」の意である。慧一は貧弱さという短所を克服できず、剣道をやめた。しかし、でこぼこ剣士会は「どんな『でこぼこ』な個性でも受け入れる」場である。『一長一短』の書が…否定も肯定もすることなく、ただただ黙って見下ろしていた」という描写は、「世界一平等な剣道チーム」であるこの剣士会のあり方を表している。

〔問1〕 直前の説明にある「漠とした想像が土台となり…フィードバックが入る」という一連の内容を読み取る。筆者は、科学者は想像から仮説を立て論理的に理論を構築するが、その過程において食い違いが生じた場合、「**実際の計算や実験結果**」に基づいて、**仮説・論理の筋道・計算や実験の仕方などを修正していくと説明している。**

〔問2〕 第五段までは、想像力に基づいて新しい知識を創出するという科学研究の在り方と、科学者の思考過程が説明されていた。これを踏まえて、第六段では、「**科学はいかなる意味を持っている**」かという観点から「**科学のための科学**」という側面を示し、以降の段落の科学の意味についての説明へと論を展開させている。

〔問3〕 「危うさ」の内容は後述されている。科学者は、「**純粹な好奇心**」のみに基づいて研究し、知識を創出する。しかし、「**自分が創り出したもの**」が醜悪で害悪を与えるものであっても、その使い方を社会の選択に委ね、自ら責任を負おうとはしない。筆者は、こうした、**好奇心の赴くままに研究する一方、創出した知識の使われ方についての責任をなおざりにしてしまいがちな科学者自身の姿勢を、危ういと警告している。**

〔問4〕 第九段で筆者は、「**社会のための科学**」という観点を持つことの重要性を指摘している。「**社会のための科学**」とは「**広く社会との関係を強く意識した科学研究**」であり、社会的実利ではなく「**社会に息づく文化への寄与としての科学**」である。また、「**文化への寄与**」については第六段に「**科学は文化の一部門として、主として人々の精神的活動に寄与する**」と説明されている。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

〔問1〕 『伊勢物語』の名称の由来について、第六十九段に「伊勢の国」とあることによるとし、その章段が「**最初に書かれた**」点と、「物語の冒頭の書き方のパターン」の基本に従っている**ただ二つの章段のうちの一つである点を挙げている。**

〔問2〕 「思ほゆ」は「自然と思われる」の意。直後の「」でくくった部分に和歌の現代語訳が書かれているが、「思ほえず」は、「夢か現か」「寝てか醒めてか」も受けているため、文末に置かれている点に注意する。

〔問3〕 「狩りの使い」に行くという設定が史実に合わないこと、齋宮との密通や女から贈る後朝の歌は現実にはあり得ないことから、フィクションと分かる。また、その作者が**在原業平であることは、作中の歌の特徴が示している。**

〔問4〕 「身を用なきものに思ひなして…行きけり」という旅の様子が『伊勢物語』第九段に書かれたのは、「**野外に出て山野に心を遊ばせること**」が「まさしく『みやび』の実現」だったため、せめて物語の世界で実現させようとしたからである。この第九段については「**まさしくその逍遙の姿勢**」であるとも述べられており、「みやび」と「逍遙」とは共通した感覚であるとわかる。「逍遙」とは「**山野を遊覧し、心を解き放つこと**」によって、**俗にとらわれない悠々自適の世界を求めもの**」だと説明されているので、ここを抜き出す。

〔問5〕 傍線部とイは比較の対象を示す助詞。ア・ウは大体の程度を表す助詞。エは名詞。

第1回(9月)
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「社会のための科学」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「身近な体験・見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験・見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の「意見」をまとめる。「意見」の中心を一つにしぼって書くように心がけよう。

作文採点基準について

- ① 字数：百五十一字以上は減点なし。百五十字〜百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上は10点減点。

文の冒頭や段落の頭は一字あける。必ず守ること！

に	私	楽	機	し	査	テ
して	たち	し	から	た	機	レ
く	の	さ	の	こ	が	ビ
れ	生	を	写	れ	、	番
る	活	与	真	ま	冥	組
の	に	え	で	で	王	を
が	直	て	確	わ	星	見
「	接	く	認	か	に	て
社	的	れ	で	っ	最	い
会	に	る	き	っ	接	た
の	役	の	た	い	近	ら
た	立	も	と	な	し	、
め	っ	、	聞	か	た	九
の	だ	科	い	っ	い	年
科	け	学	て	た	う	前
学	で	の	、	冥	話	に
「	な	持	わ	王	題	地
だ	く	っ	く	星	を	球
と	、	大	わ	の	紹	を
思	日	切	く	様	介	出
い	々	な	し	子	し	発
ま	を	役	ま	が	て	し
す	豊	割	し	探	い	た
。	か	で	た	査	ま	探

200 100 25

「こうい場合、や・や」は
改行せず、行の末尾に入れる。

〈体験・意見の中心をしぼる〉

「体験・見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験・見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験・見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験・見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験・見聞」の形が、「意見」の形が、二つのどちらかがよい。(右の例は前者)

- ② 内容：「自分の意見、主張」が書かれているか、「筆者の主張」を踏まえた内容になっているか、「具体的な体験や見聞」があるかどうかを採点項目とする。また、論旨に一貫性があるかどうかに関しても採点項目とする。なお、本文の抜き出しや要約になつていゝものは10点減点。

- ③ 文脈・構成・記述・他：文ごとのつながり、一文中の組み立て、語句の使い方、原稿用紙の使い方、文体の統一などの言葉の特徴やきまりの不備を減点項目とする。また、誤字・脱字・送りがなの誤り、適切な漢字使用などの表記不備も減点項目とする。

(減点などの採点基準は都立入試の採点基準に沿っています。)

〈書き出しを決める〉

いずれにせよ、「体験・見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

「体験・見聞」の形の場合は、右の例のように、「体験・見聞」を簡潔に書く①、②。そして、その「体験・見聞」についての「意見」を書く③④。右の作文では、「新しいことを……楽しさを与えてくれるのも、科学の大切な役割」という意見につながる体験・見聞を選んで前半で述べることで、後半の意見を導いている。「意見」体験・見聞の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、それについての「体験・見聞」を述べる。

